

相互行為としての観賞：評価と移動の関わり

Museum experiences as co-operative actions: based on the observation of visitors' assessment and moving

内田尚紀¹⁾

指導教員 山崎 晶子¹⁾

1) 東京工科大学大学院 バイオ・情報メディア研究科 メディアサイエンス専攻
山崎研究室

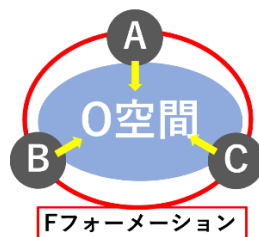
キーワード：相互行為分析, エスノメソドロジー, 共同鑑賞, 美術館

1. 研究概要

本研究では、美術館や観光地といった、複数人で移動しながら鑑賞、評価を行う場での相互行為を分析する。このような相互行為が、展示物に対し感想を述べる評価がどのような身体動作によって示されているか、また展示物に対しての評価(感想)が移動にどのように関わっているかを分析し、基礎研究とガイドロボットや遠隔鑑賞ロボットの開発に還元することを目的とする。

2. 先行研究

今回の研究では、Garfinkel によって定義された我々が常識的に用いている規範を分析するエスノメソドロジー的な観点を用いて分析を行う。



[図1] Fフォーメーション(F陣形)

視線などの動作領域を共有することで構築される陣形をFフォーメーション(F陣形)、共有される領域をO空間とする。[1] (図1)

3. 研究方法

実験方法としては、実際の美術館等で複数人の実験参加者が何かを鑑賞している様子をビデオカメラや手持ちカメラである OSMO pocket を用いて撮影したデータを使用して分析を行う。

4. 使用する実験データ

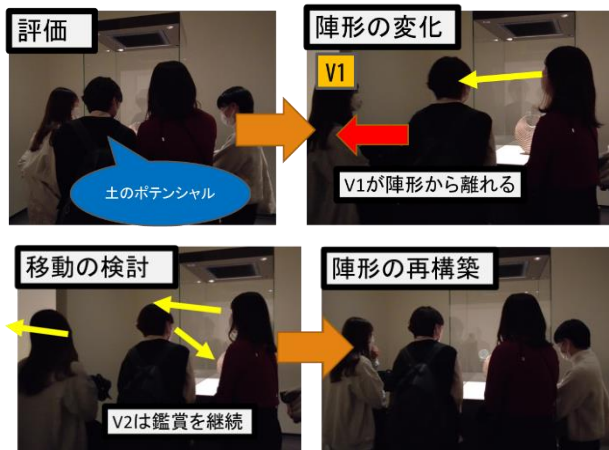
今回の分析に使用するデータは、2023年1月に静岡県熱海市にあるMOA美術館で実験参加者4名が工芸展「未来につなぐ工芸」の展示物を鑑賞している様子を複数のグループで撮影したデータを使用する。

5. 研究データ分析①



[図2] 研究データの参加者

図2は、独立した展示物を、4人の女性グループ(左からV1~V4)が鑑賞している一場面である。

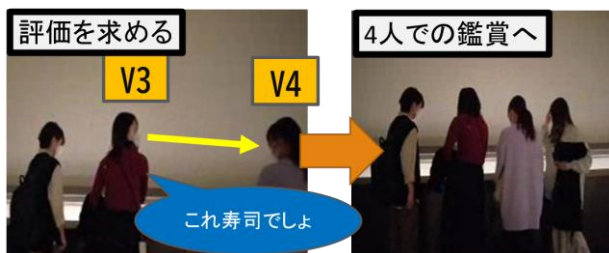


〔図3〕 視線による移動の検討

V2が展示物の評価を述べた後、V1は一步下がり展示物を中心とした陣形から外れる。V3もV1に視線を向けて移動を始め、V1も視線を順路に向け。しかし、V2が鑑賞を継続したことを受けて、移動を始めようとしていたV1も再び展示物に近づき、陣形が修復された。その後、鑑賞の中心となっていたV2がV1に視線を向けたことで次の鑑賞物への移動が行われた。(図3)

このことから、共同での鑑賞行為において、展示物に対する評価などが終わった後、発話でのやり取りを介すことなく、視線によって移動の検討が行われていることが分析できる。

6. 研究データの分析②



〔図4〕 評価による陣形の再構成

図4は、横長の展示台に複数の展示物が並んでいる場所での鑑賞行為である。V2とV3、V1とV4に分かれて別々の展示物を鑑賞していた所に、V3がV4達に対して自分達の見ている展示物に「これ寿

司でしょ」と評価の同意を求めることで、2人ずつから4人での鑑賞行為に陣形が再構築されている。

この場面では、4人以上での共同行為で陣形が複数に分かれた際、自分達の陣形の中にある対象物に対する評価を別の陣形にいる参与者に求めることで、自分たちの陣形に取り込み、共同鑑賞行為の修復が行われていることが特徴と分析できる。

7. 考察

分析①と②共に、展示物への感想を述べる評価を行う発話と視線が移動に関係していることが共通点として挙げられる。分析①でV2の展示物への評価が行われたことで、他の参与者が移動を始めようとしていた。また、分析②でV3が自分の見ている展示物の評価をV4、V1に求めていたことから、共同鑑賞行為において、集団内での共通認識としての評価を出すことが重要であり、評価を行うことが次の展示物への移動を行うトリガーになっていることが考察できる。

8. 今後の展望

今後の研究予定としては、既存のデータ中の発話や視線を文字起こししたトランスクリプトを作成することで、展示物に対する評価と移動の関連性をより詳細な分析を行う。また、ロボット等を用いた遠隔での共同鑑賞実験など、異なる条件下でのデータ撮影の実施、分析を行いたいと考えている。

参考文献

[1]山崎敬一, 浜日出夫, 小宮友根, 田中博子, 川島理恵, 池田佳子山崎晶子, 池谷のぞみ, “エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック”, pp292-309, 2023